書翰

伊豫の国の「田野佐伯」など

愛媛県周桑郡丹原町長野
賛助会員　佐伯清次郎

〔これは編集者宛はがき便りでありますが、お願いして全文をかかげ、会員の参考にいたします。〕

「佐伯史談」六十五号拝受致しました。

佐服氏の「佐伯推定と藤堂氏」、「わが佐伯家の伝承」等意義深く拝見しました。

当地には豊後佐伯氏の伝承の家は多く、合併前の田野村は他方より「田野佐伯」と云われる様に、約三十戸位が現住していますが、中には明治当時に由緒なく、又先年一部の人の創氏等に由るものもあり、佐伯氏必ずしも豊後出とも云えない様です。「大神姓緒方流佐伯氏」と公称するものもあります。研究すれば興味深いものがあると考えます。

近鉄佐伯氏は私と同一部落者ではありますが、親戚関係はない様です。

次に図書寄贈欄の「年弥呼」を入手したいと思います。発行所、定価等御教示願えれば幸です。入手できない様ならば致し方なく、貸出して載きたいと思います。

私の宅は、徳川中期頃より「トビ屋」の屋号でありますが、他に同一屋号なく、何か豊後に関係ありはせぬかと考えていたので。

（以上）

研究

佐伯と因木田独歩（六）

―お寺と教会と――

会員　山本保

独歩の日記（報かざるの記―明治二十七年二月一日条）を紹介します。

尾関（明―偶谷学館生徒）、山口（行一）及氏敬に（独歩の弟）と四人同道、散歩に出づ。城山をめぐり、中ノ谷に出でて帰る。

墓地（養賢寺）の傍を過ぐる時、偶々前面より四、五人の人あり、内二人柩を荷うて来る。吾等止まりて埋葬を見る。彼等冷然として之れを埋め、見る者もまた冷然として顧るなり。自然もまた冷然として関する所あらず。

凍雲暗として山を掠めて走り、寒飈もまた颯々として樹梢に鳴れども、一個人間の死屍を其の土中に没納するに於て何の変る所もあらず。而も死なる方則は吾等人の上に厳然として行はれつつある大事実なるずや。怪しむべき哉これらの対照なり。

自然、人間、生死、この三者に通流する秘密は依然として人之れを知る能はず。

独歩の遺文「吾が土曜日の夜」を掲げます。

土曜日の夕暮は来りぬ。連日蕭々と降りつづける春